

農村性と社会的差異の構築に関する研究動向 —英語圏人文地理学における若者研究を中心に—

杉山 和明*

Kazuaki SUGIYAMA

A review of research trends concerning rurality
and the construction of social differences:

Focused on youth studies in Anglophone Human Geography

キーワード：若者，農村性，社会的差異，空間行動，質的調査

Key word: youth, rurality, social differences, spatial behavior, qualitative research

I はじめに

現実社会における若年層の諸問題や若者文化への関心の大きさは裏腹に、日本の人文地理学においては、学会誌上で青年層に属する人々について検討されることが少なかった。子どもの地理学の進展(大西 2000, 寺本 2003)に比して、若者への関心そのものが薄かったといえよう。

筆者は、こうした状況を打開し社会地理学の立場から若者研究に寄与するため、英語圏人文地理学の研究視座を紹介するとともに(杉山 2003)、日本の文脈を踏まえて、地方都市における若年層の生態や、かれらに対して諸集団が与える意味や諸活動を明らかにする作業を続けてきた。他方、日本の地理学における職住移動研究においても近年、若年者を対象として扱う研究が徐々に増加しており、学会内で若者への関心が高まっているように見える。

しかしながら、いわゆる文化論的転回 cultural turn 以降の議論を導入し、若者というカテゴリーに位置づけられ、あるいは自らを位置づけようとする

人々にかかわるテーマを中心に取り上げる研究は、まだ少ないといわざるをえない。英語圏人文地理学において、若者に対する社会的なまなざし、あるいは家庭、学校、近隣、公共空間といった諸空間における社会的差異を巡る若者の経験の探求が一層進んでいるなかで、日本の地理学においては、いくらかの論考がみられるようになっているものの、依然として蓄積が足りない。

こうした現状に鑑み本稿では、英語圏人文地理学における若者研究のなかでも、これまでほとんど日本に紹介されることがなかった社会的差異の構築と農村性のかかわりに着目した研究動向を整理しその論点を抽出することを目的とする。研究が盛んな英語圏人文地理学とその近接分野の動向を概観することで、日本における今後の研究の方向性を探ることにしたい。

* 大阪市立大学都市研究プラザG-COE特別研究員

II 英語圏における研究動向

英語圏の人文地理学や農村研究では、もろもろの定義や表象によって社会的に構築される農村性への関心が高まるとともに（高橋 1998）、実際に農村性を付与された空間に居住・生活あるいは来訪する、女性、子ども、若者、レズビアンやゲイ、人種的、民族的マイノリティなど周縁的な集団が日常的に蒙る疎外感、コミュニティのなかでのかれらの領域性などが、事例を通じて盛んに論じられるようになってきた（Cloke and Little 1997）。こうした農村性の社会的構築と他者の問題を扱う議論のなかで、農村における他者のなかでも大人社会からも排除されているということから、とりわけ農村の子ども・若者に関心が集まっていくことになる。

個々の研究を整理する枠組を得るために、ここでは2002年の *Journal of Rural Studies* 第18巻2号に掲載された農村の若者に関する特集を取り上げてみたい。なぜならこの特集が、Philo (1992) による農村研究における子どもの不在への問いかけから10年後の一つの到達点であり、農村研究に新たな展開をもたらす重要な貢献だったといえるからである（Roche 2003; 田林 2004）。

各論考の主題を的確に整理した巻頭論文である Panelli (2002) は、農村と若者の関係を問う現代の研究潮流を分類すると、農村にかかわる知識、仕事、社会関係、政治参加、空間と場所という五つの領域をめぐって展開しており、若者がそれぞれの領域と如何に折り合いをつける *negotiating* のかが研究の焦点となっているという。そして、若年者の生活の理論化と概念化、共通する関心を持つディシプリン間の架け橋を作ることを強調する。

この分類を参考にして、1990年代から展開してきた農村性と若者の関係を探求した代表的な研究を概観することにしたい¹⁾。複数の領域にまたがる研究も多いが、便宜上最も適すると思われる領域のなかで紹介するようにしている。各領域と対応する研究例の分類については第1表に掲げた。

1. 農村的な知識

まず、すべての研究に関係する「農村的な知識 *rural knowledge* との折り合い」を問う意義を押し

えておくことが必要だろう。そもそも都市化は農村の表象を消し去るのではなく逆に強化するため、都市／農村をめぐる表象の政治は現代においても大きな意味を持っている。

近年の農村研究における文化論的転回を整理した Cloke (1997) は、農村性、特に農村の理想化された牧歌性の社会的構築と、それらが「主体」の形成に及ぼす影響ならびに他者を排除する様式を批判的に検討することが重要であると指摘する。たとえば、農村性と子ども時代が対になって構築される場合が多々あり、これらの表象は子どもの像を規定するとともに（O. Jones 1997, 1999; Valentine 1997）、個々人の属性の違いによってまったく異なる農村体験をもたらすことになるのである。

こうした議論の文脈のなかで、若者が、農村に関してどのような知識を持っており、それをどのようにしてどこで得ているのか、あるいは、そうした知識にもとづいて若者はどのようにして農村生活のなかで自分自身の意味を見いだしているのかが問われることになる。これは農村と若者を考える近年のあらゆる研究に見られる基本的な枠組みとなっている。

同特集のなかで McCormack (2002) は、ニュージーランドの農村において、物的な経験や言説的な経験が折り合わされることによって、子どもの農村性に関する理解が発達していく様子を探求している。農業、自然、娯楽の体験に基づいて農村性が構築されることや、子どもが農村性を多岐に渡り経験し理解していることを例証している。こうした異種混交性は、個々人の来歴を調査することを通じて明らかになるため、子ども自身の個人的な文脈において子どもを考察することが重要だとしている。

また、Haug (2002) は、多民族国家である中央アメリカのベリーズ Belize において、学校教育で教える民族観にたいし、自らの生活の中で独自にエスニック・アイデンティティを形成する農村の子どもを描いているが、ここには、学校のカリキュラムという権力的な言説と若年者自らの経験との対照性を見て取ることができる。

同特集以外では、とりわけ農村的な知識に関して Nairn et al (2003) は非常に興味深い研究報告を行っている。農村／都市環境の両者で公共空間における若年者の体験に着目し、若年者が自分たちのたむ

ろする場や、包摂と排除の体験をどのように語るかを調査することで、若年者の生育にとって理想的とされる農村環境と、相対する都市環境という二つの表象に異議を申し立てる。農村空間は一般に表象される場合とは逆に、包摂的ではなく排除的な空間であることを、インタビューを中心とした質的調査を用いることによって、農村環境と都市環境において若年者がそれぞれの空間をどのように捉えているのか探求するなかで説得的に示している。

他にも、Yorgason (2002) は、モルモン教を事例に、地域的アイデンティティの形成過程を考察し、特定の自然環境に対する文化的な観念を生み出す道徳秩序を通じて、地域がどのように文化的に構築されるのかを明らかにしている。

2. 農村的な仕事

第二に、「農村的な仕事 rural work との折り合い」に関する研究である。農村的な状況のなかで若者がどのような生産・再生産的な仕事を行い仕事を学びつつ、そうした状況と折り合いをつけているのか、あるいは、逆に仕事はどのようにして社会的、空間的に若者の農村体験を形成しているのかが問われている。

同特集に収められた二つの論考がこの問いを探求している。まず Hunter and Riney-Kehrberg (2002) は、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ中西部における 1870 年から 1930 年までのジェンダー化された農村の理想像に着目し、かつてもっぱら労働力としてみなされていた少女の立場が、20 世紀に入ると、都市中産階級においてふさわしいとされる子ども時代と女性らしさのモデルが流入してくることで、揺らぎ争われるものになっていく過程を明らかにしている。

Punch (2002) も、若者の職住選択が、家庭との多様な相互依存的な関係のなかで決まることに着目し、ボリビア農村部における若者の進学と就職の過程を取り上げている。農村の若者が、教育を受けるかコミュニティのなかでそのまま働くか、あるいは地方の町に出て仕事を探すのかなどの選択を決断する場合、農村の位置、家庭の経済状況、親の態度、家族背景、ジェンダー、出生順位、社会的ネットワーク、役割モデルといった多くの構造的な制約とど

のように折り合いをつけ選択を行うのかをフィールドワークから考察している。

他方、Silvey (2000) によれば、インドネシアでは 1997 年から 1999 年の経済危機に際し、農村部から特定の都市部に移住する低所得の若い女性たちが売春を行っているとして、出身地へ帰還を促す方策がとられた。ジェンダー化された道徳秩序を媒介にしてスティグマを付与された特定の空間から、若い女性たちを排除することが正当化されるのである。このことは、ジェンダー化された性道徳が空間を通じて機能していることを明示しており、ジェンダー・イデオロギーに関するローカルな闘争への問いを惹起している。

3. 農村的な社会関係

第三に、「農村的な社会関係 rural social relations との折り合い」を扱った研究である。若者は、農村的な状況のなかで、家族、世帯、共同体など農村の構成団体のなかでどこに位置づけられ、どのような社会的な関係と差異が、若者の生活を形成するのかが探求されることになる。

社会関係のなかでも若者に固有のものとして注目されてきたのは、理想化された農村性と若者文化の対立関係がしばしばモラルパニックの形で表面化する現象である (Sibley, 1997)。Halfacree (1996) や Hetherington (1998)、Yarwood and Gardnert (2000) が論じているように、ニュー・エージ・トラベラー New age travellers と呼ばれる野外パーティのために農村に訪れる集団は、農村のなかでさまざまな軋轢を生み出している。若者は周縁化された集団であり、理想化された古き良き農村景観という心象地理の破壊者でもあるからである。ゆえに、若者が社会にどのようにかわり、競合し、それを変化させていくのかその過程の探求が重要となる。

同特集の J. Jones (2002) は、北ウェールズの混住化した農村に住む若者同士が日常生活のなかで、どの言語を話すか、逸脱的であるかどうか、放課後にどのような活動をするのかによって、お互いを不断に分類化し社会的文化的な包摂と排除を行っている過程を明らかにしている。

2002 年には *Irish Geography* 誌においても、若者に関する論考が 4 本一挙に発表されているが、その

なかの一本である Laoire (2002) は農村に関する研究であり、近年のアイルランドにおける農業再編のなかで、伝統的な農村のマスキュリニティがいかに変容しているのかを、若年の農夫へのインタビューから明らかにしている。オルタナティブな農業の語りと伝統的な農村生活のイデオロギーとのあいだの相互作用から、若年の農夫のなかにより開かれた、柔軟なタイプのマスキュリニティが見出されるようになってきていることを示している。

最近では Garland and Chakraborti (2007) が、イングランド農村域における取り締まり、コミュニティ、人種の関係性を、若者を含むさまざまな人々へのインタビューを通じて検討している。これは、地理学の雑誌に発表されたわけではなく犯罪学の論考であるが、農村性に関する近年の地理学研究を多数引用しそれらの成果に大きく依拠しており興味深い。

村落空間は中立的ではなく、人種化され争われており、著しく異なる「他者」の存在によって増幅される、農村に暮らす白人のあいだにある不安の感情が、結果として主流のコミュニティ活動から少数派の民族集団を周縁化することに結び付いている点を示している。これらの集団は、しばしば人種主義者による攻撃の犠牲となるものの、ローカルな諸機関によって認識されておらず、また農村において多様性を取り締まることには諸々の解釈がありえるため、農村空間の多様化や、部外者の「他者化」に対するより繊細な理解を発展させる必要があると提言している。

さらに、*Progress in Human Geography* 誌上に掲載された、近年の若者に関する展望である Hopkins (2007) も、特定の場所の文脈、状況、固有性、ローカルティを考慮しつつ、若年者、マスキュリニティ、宗教、人種の四つの社会的差異を個別ではなく同時に扱う「新たな社会地理」に向けた研究を提起する。

まず、郊外化の過程が、従来あったエスニック・マイノリティとインナーシティの伝統的な結びつきに変化をもたらしていることから、郊外や農村の生活にも目を向ける。そしてインナーシティや郊外、そして農村といった特定の時間と場所における複数の社会的差異が組み合わされて形成されるアイデン

ティティに関心を示し探求していこうという問題意識は、イギリスにのみ固有なものではなく、異なるコンテキストにおいても共有されうるだろうと述べている (Hopkins 2007)。

とりわけ、白人アイデンティティに着目することで、「農村空間が人種化される仕方や、異なる人種・宗教の若年集団—白人、アジア、ユダヤ、クリスチャンなど—がどのように、そうした結びつきを保護し、それに反抗し、挑戦するのか探求しようとする」(Hopkins 2007, 170)ことに役立つ。黒人やエスニック・マイノリティの若い男性についての研究によって、そうした立場にある若い男性の包摂と排除の感覚、特定の場所がアイデンティティの構築に影響を与える方法、そして特定の状況がかれらの未来に提起する困難を探求することができるかと主張している。

4. 農村的な状況における政治参加

第四に、「農村的な状況における政治参加 *political participation in rural setting* との折り合い」に関する研究である。農村的な文脈のなかで、若者の意志決定と政治参加の経験はどのようなものであるのかが明らかにされなければならない。

同特集のなかの Gabriel (2002) は、オーストラリアのタスマニアからの若者の流出を報じた地元新聞メディアの見解の政治性に注目している。それらにはジャーナリスト、政治家、役人、親などの思惑が大いに反映されていた。大別して、昔の状態を保持しようとする懐古趣味の衝動や、若者を管理しようとする温情主義的 *paternalistic* な衝動によって動機づけられているものと、若い成功者の不在を嘆くものの二つがあり、それらが交錯するなかで若者の表象が構築されていくこと、また、同様の発言が全国的に見られることを明らかにしている。若者の職住移動が、こうした見解によっても影響を受けることから、従来の統計的なアプローチを批判し、職住を決定する政治的な要素をもっと見極める必要があると主張する。

若者の表象をめぐる複雑な政治が錯綜する文脈のなかで、たしかに若者の政治参加にはさまざまな困難が伴う。しかし、農村の若者をうまく認識し取り込むようにするには、制度や政治的過程をどのよう

に変化させればいいのか、あるいは、かれら自身がどのようにして確立された農村政策と政治構造に応答できるのかが問われるべきであろう。

たとえば、Skelton (2000) は、地方都市に住む少女を疎外する空間と、その改善を目指すコミュニティ・プログラムの取り組みを明らかにする過程で、こうした困難な問いに答えようとしている。彼女は、北ウェールズのロンダに住む労働者階級の 14 から 17 才までの少女の日常の地理を描く調査のなかで、少女たちが、自分たちの声が届いていることを常に確認することを通じて調査内容そのものを構築していく点を指摘する。このような、調査する側と調査される側による調査自体の相互的な構築過程を解明することは、調査を行う際につきまとう政治性や倫理を考える上で重要な課題となりうるのである (Skelton, 2001)。

同特集の Smith et al (2002) も、若者参加型の調査プロジェクトにおいて、若者の農村体験が、大人から見たステレオタイプといかに懸け離れたものであるのかを示し、かれらが農村の生活とコミュニティの日常空間を変革していく可能性を見だし評価している。

より広い空間の文脈における政治的な実践の事例としては、Halfacree (2006) が、都市生活と消費生活を放棄して農村的空間において自給的生活を送る帰農運動、いわゆるカウンターカルチャーとしての大地へ帰れの試み *back-to-the-land experimentation* の過程を取り上げている。1960～1970 年代の運動が、田園地方について批判的な問いを惹起する一方、周縁的な空間を、主流の外側にあるオルタナティブに転換させた点について検討し、土地と日常生活の一体的な関係性の程度を批判的に問うことも、この運動を評価するために不可欠だと述べている。

5. 農村的な空間・場所

第五に、若者による「農村的な空間・場所 *rural space & place* との折り合い」の過程に関する研究である。これらは、特定の農村空間のなかで若者が自身の活動と生活にとって重要な場所を主体的に構築し、さまざまな意味を付与する過程を克明に記述しようとする。若者の行為は逸脱的だとみなされるも

のであるとともに、他の多くの聴衆に向かって発信する手段でもあるため、周縁化された若者が自己を表象する手助けとなるかもしれない。

同特集の論考のなかでは Kraack and Kenway (2002) が、オーストラリアのニューサウスウェールズの海岸でたむろする若者男性の身振りを、「多元的差異の幾何学」を通じた若者のアイデンティティの構築過程として論じている。「多元的差異の幾何学」とは、Massey (1993) の「権力の幾何学 *Power geometry*」と、ハラウェイ (2000) のパフォーマンスについての議論から着想を得て名づけられた概念であり、固有の場所における権力関係を読み替えていくような身振りを生み出す諸関係を表している。

かつて栄えていた漁業が産業構造の転換によって衰退したため多くの人が他所へと去った後、この地は、低所得者には安価な、そして新たに退職したホワイトカラーには老後の安らかな住宅を提供するという二極化した場所になっている。親の世代とは全く違った時空間の文脈に置かれた若者たちの振る舞いは、移住してきたホワイトカラーにはもちろんのこと、親たちにも奇異な目で見られている。しかしそうした身振りは、かれら自身が置かれた現状をなんとかしのいで折り合いをつけていくための戦術なのであり、他方でこうした能動的な実践を育む文化が、逆にかれらが他の場所において高度な熟練を必要とする職に就くことを困難にさせるような態度を身につけさせるのである。

共通する問題意識から、同じく特集のなかで、農村空間の特定の場所を通じたアイデンティティの構築に焦点を当て、農村的環境において新たに出現した消費空間と若者文化の関係を探求している Laegran (2002) は、ノルウェー中部の二つの村落において、さまざまな属性を持つ若者たちが、以前から改造車に乗った一部の若者のたまり場であったガソリンスタンドと、新たに出現したインターネットカフェの両者をそれぞれどのように利用し、いかなる意味を付与しているのかを、詳細なインタビュー調査によって明らかにしている。

ノルウェーやスウェーデンの地方村にある多くのガソリンスタンドは、改造車に乗った若者たちが、互いにマスキュリティを誇示しあう唯一の集会所であり、かれらのアイデンティティ形成にとって重

要な意味が付与された場所となっていた。こうした若者文化は、もともと 1950 年代から 1960 年代のアメリカの車文化にルーツを持っているが、現在ではスウェーデンやドイツ製の車へのあこがれと、ローカルな労働者階級の文化が融合されたハイブリッドな形式を生み出しており、ここ何年ものあいだ農村でみられる若者文化の特徴となってきた。しかし、ガソリンスタンドのような公共空間での集会は大人社会にとっては煩わしいものに過ぎない。大人たちは、こうした場所に代わるものとして、都市部で人気を博しているインターネットカフェを導入し、改造車に乗ってガソリンスタンドに集合する若者の活動を止めさせようとする。二つの村において同じコンセプトのもとで作られたカフェは結果的に、ローカルな文脈のなかで全く違う象徴的な意味を帯びることになり、利用する若者の年齢や性向によって異なる意味が付与された場所となっていくという。

同特集に納められた論考以外では、英国ノーサンプトンシャーの農村に住む 10~14 歳までの少女たちが集う農村のなかの遊び空間 *recreational spaces* をグループインタビューによって考察した Tucker and Matthews (2001) がある。この研究は、大人でも子どもでもない 10 代の少女が、家庭外の環境をいかに利用しているのかを探求することで、遊び空間の多元的現実を把握し、諸集団による遊び空間をめぐる対立を明らかにしている。

少女たちは、レジャーセンター、喫茶店、レストランといった遊び空間を好んでいるが、それらを監視し問題視する大人の視線にさらされ、大人の介入なしにたむろできる場所は少ない。遊び空間が少ないことが、若者集団間の様々な対立を招いており、少女たちがジェンダー化された空間によって排除され周縁化されている。それゆえに、公共空間への権利を求める少女たちには、望ましくない「下品 *cheap*」というラベルが貼られるリスクが伴うことを論じており、子どもの生育環境にとって理想とされる農村の子ども時代という神話を脱構築している。そして、農村の子どもの多元的現実は依然としてよく知られておらず、一層の探求が求められると主張する。

これら三つの研究は、農村的環境において新たに出現した消費空間と若者文化の関係を探求しており、

郊外化と消費空間の拡張のなかで問題化される現代日本の若者を考察するうえでも示唆に富んでいるといえる。

関連して、空間を通じた身体化の議論も見逃せない。Little and Leyshon (2003) は、特定の空間設定において身体化された *embodied* パフォーマンスに着目する研究が増加しているなか、農村空間に着目した研究が少ないと指摘している。農村的な社会関係やコミュニティを探求するうえで、身体を考慮することが重要な課題だとして、身体化された農村の地理を探求し、農村域におけるフェミニティ、マスキュリティ、農村性、セクシュアリティのパフォーマンスのあいだの関係性を検討している。そして、農村的なマスキュリティやフェミニティの支配的な構築が、身体についての伝統的な捉え方や、セクシュアリティやジェンダー・アイデンティティに対する慣習的な態度を反映したものであることを示している。

以上の研究で示されているのは、農村空間の特定の場所を通じたアイデンティティの構築が極めて混成的 *heterogeneous* であるということだ。農村を、子ども・若者などが日常的に多様なパフォーマンスを通じて大人や他の集団の付与する支配的な意味と折り合いをつけ混淆したアイデンティティ形成を促す空間として描き出すことによって、無垢な子どもを育む理想化された農村環境という神話を根底から覆している。

6. 共通する方法論としての質的調査

多くの人文・社会科学において個々人の親密な社会関係を考察しようとするときインタビュー調査は重要な研究方法である。農村性と社会的差異の関連を扱った多くの論考においても質的研究は不可欠の手法となっているが、近年、立場性の問題が繰り返し論じられるようになってきた。

Barker and Weller (2003) によれば、1990 年代以降、子どもを大人に依存する受動的な対象として捉えるのではなく、環境を理解し働きかける社会的なアクターとして捉える傾向が強まり、地理学研究において、より「包摂的」で参画型の調査法 '*inclusive and participatory research* の発展をもたらした。ここでは方法論の問題として、調査の空間性、つまり、

調査を行う空間と調査の対象となる空間の両者を区別して認識することが議論されている。

社会地理学における「参画型調査法 Participatory Research (PR)」の展開 (Pain, 2004) も注目される傾向であろう。一言でいえばそれは参与観察から参与型調査法への移行といえる。この際、調査者自身が農村の若者とかかわる上で、倫理的な問題への注意を常に意識する必要がある、また新たな調査方法を開拓していくことも求められるが、そうした認識を持つことでこれらの仕事が進展していくはずである (Leyshon, 2002)。

ただし、子どもの地理、若者の地理で行われている議論は、認識論的な問題に固執するよりも、調査手順の開示を明確に行うことによって、調査結果の確からしさ *credibility* を得ることのほうに傾注する研究が多いという印象を受ける。質的調査の大半においては、方法論や認識論について厳密な議論を行うよりも、現場の臨場感を再現する流行として採用されている面もあるのかもしれない。

特定の人間を対象にする行為自体に内在する調査者の有する権力性について議論する論文もあるが、この主の問題には深く立ち入るのはそれなりの覚悟がいる。

いずれにせよ、地理学者にとって「会話分析」そのものは研究の目的ではないため、分析の深度をどの程度に留めるのか、方法論や認識論をどこまで掘り下げていくべきなのかについては議論の余地があるだろう。ここでは、事例研究において積極的に活用されるようになってきているフォーカスグループによるグループインタビューに関する最近の議論を簡単に紹介しておきたい。

Hopkins (2008)によれば、すでに地理学内でフォーカスグループの使用は定着しており一種のブームになっているものの (Crang 2002)、インタビュー、民俗誌、参与観察のような他の質的調査法に比べて、これまで批判的検討が加えられてこなかったという。

彼自身は、スコットランドに暮らす 16~25 歳までのムスリムの若者の生活時間に関する調査 (アイデンティティ、帰属、包摂/排除の多元的感覚に関する論題について議論) において、フォーカスグループによるインタビュー調査を行った経験を持っている。そこから導き出された今後の検討課題につい

て、「人文地理学者は、ローカルティ、コンテキスト、時間がフォーカスグループの相互作用に影響する複雑な仕方に対して、批判的に応答しうる理想的な立場にある。これには、特定の位置、場所、時間—ローカルな景観—が、フォーカスグループの討論に与える影響を分析することに加えて、異なるスケールにおける課題、関心、出来事、そしてグローバル、トランスナショナル、ナショナルのマクロな地理が、フォーカスグループの討論や相互作用に影響する仕方を分析することも含まれるだろう」(p.534) と述べている。

Ⅲ おわりに

以上、農村性と社会的差異の構築の関係を視野に入れた若者に関する研究を概観してきたが、いずれの研究も定性的な調査から、異なる社会的、経済的、文化的なコンテキストのなかにいる若者にとっての空間、場所そして諸活動の関係ならびにかねらの場所感覚を描いており注目に値する。

その中心的な課題を端的に言えば、特定の社会的空間的状况のなかで構築されるアイデンティティ・ポリティクスを脱本質化することに向けられていると考えられる。アイデンティティが社会関係のなかで確立されるからには、必然的にポリティクスが伴っている。アイデンティティ・ポリティクスから逃れることは容易ではないというよりは両者は不可分ののだが、アイデンティティの社会的空間的構築を辿ることで本質的な理解を他のより開かれた捉え方に変容させることはできるかもしれない。

若者の主体的な場所への意味付与を問う仕事は、地理学的な若者研究の一つの可能性を示している。この可能性を切り開いていくことに、理論に裏付けられた経験的研究の持つ意義があるだろうし、質的研究を積極的に事例研究のなかで用いて主体の経験を描き出してきた英語圏人文地理学内での展開を参照することが望まれよう。

これまで日本の人文地理学内での都市や農村の研究はこうした問いに関心が薄かったが、都市性や農村性、郊外性に焦点を当てた研究の進展が求められるのは日本においても変わらない。Imazato (2008)

が述べているように、研究のグローバル化は必定であり、英語圏においても共有される概念枠組みの構築を進めていくことが不可欠であろう。日本の文脈においても、本稿で検討してきた研究のなかで示された知見には有用な側面が見出せるはずである。

ただし、留意すべき点もある。それは、そもそも歴史的文化的な文脈を異にすることと、調査参加者が郊外化の進展する都市近郊農村に居住し、日常的に訪れる場所が必ずしも農村的だとはいえない空間である場合が多いため、農村研究という枠組のなかに収まりきらないことである。

主観の側から捉えた場合、都市性／農村性は相対的なものであり、特定の空間を対象とする研究を固定的な基準を用いて都市研究あるいは農村研究の領域として峻別してしまうと、主観による表象の移ろいを捉え損うことになる。むしろ特定の空間的な状況において、特定集団の主観のなかで都市性／農村性がどのように構築されているのか、それらを横断するような視座が求められよう。空間性を考えるときに、農村と都市における地域性の連続や断絶の語りは重要な分析対象となりえる。今後一層、人文地理学における事例研究の蓄積と方法論の検討を進めることが必要となろう。

グローバル化の進展により、都市に流入する人口の増加が加速している。しかしながら、日本にとって社会生活における都市の中心性、あるいは都市化する近郊農村と他方で過疎化する山間部の農村の問題は、高度経済成長期以降くりかえし語られてきた。現在日本の人口の大半が都市的地域に暮らし、社会生活の中心は完全に都市となっている。農村から都市への視線が優位であった時代はすでに過去のものとなり、都市から農村への視線が圧倒的に優位になっていることは疑いない。農村地域に居住する人々が多数派であったとき、都市性の特異性が表象されたように、都市地域の拡大によって、牧歌的景観や農村の特異性が新たな文脈において表象されるようになっている。大型小売店が相次いで進出し郊外化とスプロール化が進展する都市近郊農村という空間の広がりには混住化の進展と結び付いているが、他分野では、こうした状況における若者の問題を扱う論考も多い。

筆者も、同様の問題関心から、本稿で論じた英語

圏人文地理学における農村性と若者に関する研究の枠組みを援用しつつ、浜松都市圏東部に暮らす高校生を調査参加者として、かれらが日頃訪れるさまざまな場所についての語りを取り上げ、若者集団の主體的な行動を明らかにするとともに、それらの空間に対していかなる意味づけを行い、どのような場所感覚を抱くのかを考察した(杉山 2008, 2009)。

農村変動が、差異のある社会集団に一律的に作用するとは限らないのであれば、個別の事例を通して社会的差異の構築と空間性との関係性を問うていく必要がある。農村性と場所感覚を、子ども、若者などの若年者や高齢者といった年齢層別に現れる差異、そして人種、民族、ジェンダー、セクシュアリティの差異に着目して究明するとともに、それらの差異が相互に作用し合い構築される過程を探求していくことも求められるだろう。

とりわけ若者にかかわる問題としては、近郊農村の生活が近年いかなる状況にあるのか、また、そうしたなかで都市性／農村性の表象が若者にとっていかなる影響を及ぼし、仕事・社会関係・政治参加や居場所を通じて、若者のアイデンティティがいかに構築されていくのかが問われなければならない。この作業を進展させるためには、若者が置かれた社会的・空間的な権力関係や社会正義の問題をどのように捉え評価するのかという研究者のスタンスが重要になってくるように思われる。

新たな研究動向に光を当てた本稿の試みが、多様な空間における差異の構築性を問い直す契機となることを期待したい。

付記

本稿は、2004年11月28日に筆者が名古屋大学に提出した課程博士論文『現代日本における若者の社会地理』の第1章7節に大幅な加筆を施したものである。

注

- 1) 本稿脱稿間近に、Panelli et al (2007) が出版されていることを知った。本書は、世界の多様な地域における事例研究から、農村的環境に暮らす子どもや若者を捉えるためのグローバルな視点を提起している重要な論集だと

判断できる。今のところ現物が手元にないため、内容の詳しい検討はできないが、書誌情報からある程度は内容を推測することができる。全17章あり、まず第1章が本書全体の序論に当てられた後、以下三部に別けて構成されている。具体的にいうと、第一部のコンテキストとアイデンティティ *Contexts and Identities* には、第2～6章の事例研究4本と第6章の総説1本が、第二部のエイジェンシーと日常行為 *Agency and Everyday Action* には、第7～11章の事例研究4本と11章の総説1本が、そして第三部の権力関係と諸過程 *Power Relations and Processes* には、第12～16章の事例研究4本と16章の総説1本、そして第17章の本書全体の結論1本が収められている。第1章の序論、第17章の結論は、編者の Ruth Panelli (地理学), Samantha Punch (社会学), Elsbeth Robson (地理学) によってまとめられており、各部の総説である第6章、11章、16章は、複数著者によるコメントとなっている。なお、2002年の *Journal of Rural Studies* の特集号に収められた論考では、Hunter and Riney-Kehrberg (2002) と同タイトルの論考が第5章として収録されており、タイトルは違うものの Punch (2002) と同内容だと思われる論考が第12章に収められている。他の論考は含まれていないことからすると、最新の事例研究が収められている意欲的な論集といえる。本書の三部構成は、Panelli (2002) の分類をより抽象度の高い分類にしたものであるが、どちらの分類にも意味があるため、本稿では Panelli (2002) の分類をそのまま採用する。

参考文献

- 大西宏治 2000. 子どもの地理学—その成果と課題—. 52(2): 149-172.
- 杉山和明 2003. 若者の地理—英語圏人文地理学における「文化論的転回」をめぐる問いから—. 55(1): 26-42.
- 杉山和明 2008. 都市近郊農村における若者の場所感覚—浜松都市圏東部に暮らす高校生の語りの分析から—. 地理科学 64(4): 239-259.
- 杉山和明 2009. 若者の生活空間と安心・不安の感覚—浜松都市圏東部に暮らす高校生の語りをもとに—. 都市文化研究 (11): . (印刷中)
- 高橋 誠 1998. 空間としての「農村」から農村空間の社会的表象—農村性の社会的構築に関するノート(1)—. 名古屋大学情報文化研究 (7): 97-117.
- 田林 明編 2004. 『日本における農村地理学の構築のための理論的・実証的研究』平成 13・14・15 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書.
- ハラウェイ, D. 著, 高橋さきの訳 2000. 『猿と女とサイボーグ—自然の再発明—』青土社. Haraway, D. 1991. *Simians, cyborgs, and women: The reinvention of nature*. London: Free Association Books.
- 寺本 潔 2003. 子どもの知覚環境形成に関わる研究と教育の動向. 人文地理 55(5): 477-491.
- Barker, J., Weller, S. 2003. "Never work with children?": The Geography of Methodological Issues in Research with Children. *Qualitative Research* 3(2): 207-227.
- Cloke, P. 1997. Editorial: Country backwater to virtual village? Rural studies and "the cultural turn". *Journal of Rural Studies* 13(4): 367-375.
- Cloke, P., Little, J. 1997. Introduction: Other countrysides? In *Contested countryside cultures: Otherness, marginalisation and rurality*, ed. P. Cloke and J. Little, 1-18. London and New York: Routledge.
- Gabriel, M. 2002. Australia's regional youth exodus. *Journal of Rural Studies* 18(2): 209-212.
- Garland, J., Chakraborti, N. 2007. "Protean times?" Exploring the relationships between policing, community and 'race' in rural England. *Journal of Criminology and Criminal Justice* 7(4): 347-365.
- Halfacree, K.H. 1996. Out of place in the country: Travelers and the rural idyll. *Antipode* 28(1): 42-47.
- Halfacree, K. 2006. From dropping out to leading on? British counter-cultural back-to-the-land in a changing rurality. *Progress in Human Geography* 30(3): 309-336.
- Haug, S.W. 2002. Ethnicity and multi-ethnicity in the lives of Belizean rural youth. *Journal of Rural Studies* 18(2): 219-223.
- Hetherington, K. 1998. Vanloads of uproarious humanity: New age travellers and the utopias of the countryside. In *Cool places: Geographies of youth cultures*, ed. T. Skelton and G. Valentine, 328-342. London and New York: Routledge. ヘザーリントン, K. 著, 神田孝治訳 2002. パンに乗ったうるさい奴ら—新世代の旅行者たちと田園地方のユートピア的なもの—. 空間・社会・地理思想 (7): 187-195.
- Hopkins, P.E. 2007. Young people, masculinities, religion and race: New social geographies. *Progress in Human Geography* 31(2): 163-177.
- Hopkins, P.E. 2008. Thinking critically and creatively about focus groups. *Area* 39(4): 528-535.
- Hunter, K., Riney-Kehrberg, P. 2002. Rural daughters in Australia, New Zealand and the United States: An historical perspective. *Journal of Rural Studies* 18(2): 135-143.
- Imazato, S. 2008. Under two globalizations: Progress in social and cultural geography of Japanese rural areas, 1996-2006. *Geographical Review of Japan* 81(5): 323-335.

- Jones, J. 2002. The cultural symbolisation of disordered and deviant behaviour: Young people's experiences in a Welsh rural market town. *Journal of Rural Studies* 18(2): 213-217.
- Jones, O. 1997. Little figures, big shadows: Country childhood stories. In *Contested countryside cultures: Otherness, marginalisation and rurality*, ed. P. Cloke and J. Little, 158-179. Routledge.
- Jones, O. 1999. Tomboy tales: The rural, nature and the gender of childhood. *Gender, Place and Culture* 6(2): 117-136.
- Kraack, A., Kenway, J. 2002. Place, time and stigmatised youthful identities: Bad boys in paradise. *Journal of Rural Studies* 18(2): 145-155.
- Laegran, A.S. 2002. The petrol station and the Internet cafe: Rural technospaces for youth. *Journal of Rural Studies* 18(2): 157-168.
- Laoire, C.N. 2002. Young farmers, masculinities and change in rural Ireland. *Irish Geography* 35(1): 16-27.
- Leyshon, M. 2002. On being "in the field": Practice, progress and problems in research with young people in rural areas. *Journal of Rural Studies* 18(2): 179-191.
- Little, J., Leyshon, M. 2003. Embodied rural geographies: Developing research agendas. *Progress in Human Geography* 27(3): 257-272.
- Massey, D. 1993. Power geometry and a progressive sense of place. In *Mapping the futures: Local cultures, global change*, ed. J. Bird, B. Curtis, T. Putnam, G. Robertson and L. Tickner, 59-69. London and New York: Routledge. マッシー, D. 著, 加藤政洋訳 2002. 権力の幾何学と進歩的な場所感覚. (933): 32-44.
- McCormack, J. 2002. Children's understandings of rurality: Exploring the interrelationship between experience and understanding. *Journal of Rural Studies* 18(2): 193-207.
- Nairn, K., Panelli, R., McCormack, J. 2003. Destabilizing Dualisms: Young People's Experiences of Rural and Urban Environments. *Childhood* 10(1): 9-42.
- Pain, R. 2004. Social geography: participatory research. *Progress in Human Geography* 28(5): 652-663.
- Panelli, R. 2002. Young rural lives: Strategies beyond diversity. *Journal of Rural Studies* 18(2): 113-122.
- Panelli, R., Punch, S., Robson, E, eds. 2007. *Global perspectives on rural childhood and youth: Young rural lives*. London and New York: Routledge.
- Philo, C. 1992. Neglected rural geographies: A review. *Journal of Rural Studies* 8(2): 193-207.
- Punch, S. 2002. Youth transitions and interdependent adult-child relations in rural Bolivia. *Journal of Rural Studies* 18(2): 123-133.
- Roche, M. 2003. Rural geography: a stock tally of 2002. *Progress in Human Geography* 27(6): 779-786.
- Sibley, D. 1997. Endangering the sacred: Nomads, youth cultures and the English countryside. In *Contested countryside cultures: Otherness, marginalisation and rurality*, ed. P. Cloke and J. Little, 218-231. London and New York: Routledge.
- Silvey, R.M. 2000. Stigmatized space: Gender and mobility under crisis in South Sulawesi, Indonesia. *Gender, Place and Culture* 7(2): 143-161.
- Skelton, T. 2000. "Nothing to go, nowhere to go?" Teenage girls and "public" space in the Rhondda Valleys, South Wales. In *Children's Geographies: Playing, living, learning*, ed. S.L. Holloway and G. Valentine, 80-99. London and New York: Routledge.
- Skelton, T. 2001. Girls in the club: Researching working class girls' lives. *Ethics, Place and Environment* 4(2): 167-172.
- Smith, L.T., Smith, G.H., Boler, M., Kempton, M., Ormond, A., Chueh, H.-C., Waetford, R. 2002. "Do you guys hate Aucklanders too?" Youth: Voicing difference from the rural heartland. *Journal of Rural Studies* 18(2): 169-178.
- Tucker, F., Matthews, H. 2001. "They don't like girls hanging around here": Conflict over recreational space in rural Northamptonshire. *Area* 33(2): 161-168.
- Yarwood, R., Gardnert, G. 2000. Fear of crime, cultural threat and the countryside. *Area* 32(4): 403-411.
- Yorgason, E. 2002. Creating regional identity, moral orders and spatial contiguity: Imagined landscapes of Mormon Americanization. *Cultural Geographies* 9(4): 448-466.

第1表 農村生活との折り合い—動的なものとして若年者の生活と経験を調査するための方針—

折り合い	方針上重要な問い	研究例
農村的な知識との折り合い	<ul style="list-style-type: none"> ・若年者はどんな農村的知識を持っているのか。 ・かれらは、どのようにして、どこで農村性についての文化的な理解を得ているのか。 ・若年者は、どのように農村生活についてかれら自身の意味と知識を生み出しているのか。 	Cloke (1997), Haug (2002) , Hunter and Rhiney-Kehrberg (2002) , J. Jones (2002) , O. Jones (1997, 1999), McCormack (2002) , Nairn et al (2003), Panelli et al (2007), Smith et al. (2002) , Valentine (1997), Yorgason (2002)
農村的な仕事との折り合い	<ul style="list-style-type: none"> ・若年者は農村的な状況において、どんな生産・再生産的な仕事を行っているのか。 ・若年者は、どのように作業を学び折り合いをつけているのか。 ・仕事は、社会的空間的に、どのように若年者の農村的経験を形成するのか。 	Hunter and Rhiney-Kehrberg (2002) , Panelli et al (2007), Punch (2002) , Silvey (2000)
農村的な社会関係との折り合い	<ul style="list-style-type: none"> ・若年者は、農村の構成団体 rural units—家族、世帯、共同体—のどこに位置づけられるのか。 ・農村的な状況において、どんな社会的な関係や差異が、若年者の生活(かれらの移動を含む)を形成するのか。 ・若年者は、どのようにかれらが参加する社会的関係に従事し、争い、変化させるのか。 	Garland and Chakraborti (2007), Halfacree (1996), Hetherington (1998), Hopkins (2007), Hunter and Rhiney-Kehrberg (2002) , J. Jones (2002) , Kraack and Kenway (2002) , Laegran (2002) , Laoire (2002), Leyshorn (2002) , Panelli et al (2007), Punch (2002) , Sibley (1997), Yarwood and Gardnert (2000)
農村的な状況における政治参加との折り合い	<ul style="list-style-type: none"> ・農村的な状況における意思決定や政治参加についての若年者の経験とはなにか。 ・若年者は、確立された農村の政策や政治構造に対してどのように応答することができるのか。 ・農村の若年者をより適切に認識し包摂するためには、どのように慣習的、政治的過程を変化させればよいのか。 	Gabriel (2002) , Halfacree (2006), Haug (2002) , Panelli et al (2007), Skelton (2000, 2001), Smith et al. (2002)
農村的な空間・場所との折り合い	<ul style="list-style-type: none"> ・若年者は、どのように異なる農村の空間や場所を経験し理解するのか。 ・異なる社会的、経済的、文化的な文脈において、若年者にとっての空間、場所、移動のあいだにある諸関係とはなにか。 ・若年者は、どのように特定の農村的空間を活用し、かれら自身の生活にとって重要な場所を構築するのか。 	J. Jones (2002) , Kraack and Kenway (2002) , Laegran (2002) , Little and Leyshon (2003), McCormack (2002) , Panelli et al (2007), Smith et al. (2002) , Tucker and Matthews (2001)

注：Panelli (2002)所収の表より作成。研究例の強調は *Journal of Rural Studies* 第18巻2号に収められた論考。

